

アフメドフ・サブヒ  
歴史博士

# アゼルバイジャンの国立歴史博物館のコレクションに見る日本槍

バクーにあるアゼルバイジャンの国立歴史博物館（以降、博物館）の中に国内、西ヨーロッパ、ロシア、及び東洋の武器が数多く揃えてある。東洋からの展示品のうち、ネパールの軍用ナイフ、グルジア及び中央アジアの短剣、アラビアの銃、トルコとイランの武器などが注目を集めている。本コレクションの中では2本のユニークな日本の同型である槍が特別だ。（博物館の旗・武器のファンド、目録号426、427）

一番目の槍（目録号426）は、ケース付きの鋼鉄先端及び木製の柄からできている。

先端は、取っ手及び羽から成っている。取っ手は、断

面が矩形で、切れ端が細い、長さ26センチの鋼ピンである。ピンの中心に穴がある。羽は、長さ15センチで、断面が三角形である。その広い平らな部分には赤の塗料が入っている小さいくぼみがある。羽の真下がピンよりもっと広いので、その断面が六角形を成している。

先端の組立が複雑なケースは、外見上シリンダーのように見える。ケース（長さ19センチ、直径5センチ）は、二つの片方を含んでおり、それぞれが先端の形をしているくぼみからできている。ケースの表面は、茶色の浮き彫りの光沢で何層も覆われている。ケースには小さなリングが入れてあり、それが、おそらく、先端を帯にかけるよう

にできている。

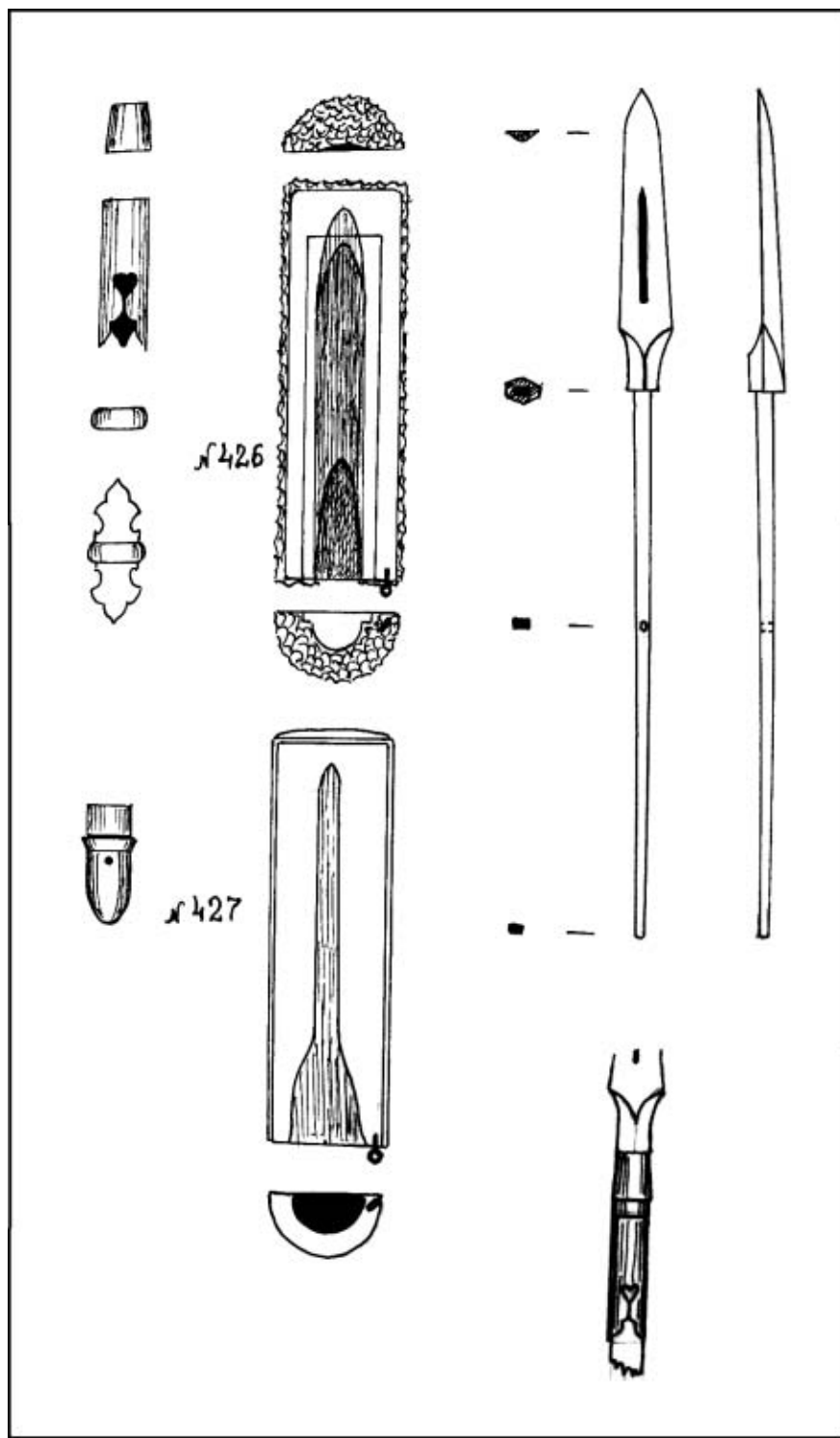
木製の柄は、長さ2.6メートル、直径2.5センチで、茶色に染められており、ニスで塗られ、光らせられている。柄の上部（先端部に隣接している）は、先端が柄を分裂しないように補強部で固められている。その補強部は、長さ1.9センチからなる鉄リング、ハート形や装飾的な葉のある銅の装飾的なシリンダー、そして凸面の鉄リングでできている。装飾的な補強部から鉄リングまでの間が小さな多彩の石や貝殻の打ちつけられている象眼で覆われている。また、起源が未知の薄い皮で編まれている二つのゆるやかなリングもある。皮は、細かい鎖の形で切られており、赤い塗料で、漆で塗られてい

る。それに、貫通穴があり、おそらく、取っ手がそれを通して釘や紐で柄に締められていたらしい。上のリングから15.5センチの間に装飾的に彫られている補強部のかけリングがある。三番目のリングは、二番目のリングより8センチの間にある。このリングの間の表面も象眼で覆われている。三番目のリングより下に薄い赤の塗漆の皮で巻かれている紐がある。

柄の下部は、滴水受皿が付けられるように仕上げられている。滴水受皿そのものが残ってないけれども、たぶん、それが管状の円錐の形をしていたようである。滴水受皿の上に高さが1.2センチの鉄リングがかけられている。

二番目の槍（目録号427）は、一番目と同様に、木製の柄、鋼鉄先端とそのケースからなっている。違いとしては、だいたいサイズ及び詳細の完全さが挙げられる。例えば、この槍の柄の長さは2.1メートルである。槍の滴水受皿がよく残られており、高さ1.2センチの鉄リング、また円錐形の筒状部からできている。高さ5.5センチ、流線型の細長い鋼の円錐が柄に釘で定着されていたらしい。ケースは、カーキ色のスエードで漆喰されている。

博物館の旗・武器のファンドの在庫帳には、これらの



槍が日本製で1920年に徴収された倉庫の所持品として目録されている。遺憾ながらも、この展示物に関する他の情報がない。

上記のモデルは、日本独特の槍であろう。

その槍は、ポールウェポンであり、複雑な先端を持ち、製造が手のこんだできあ



がりである。

日本製の直槍は、古くから使用され12世紀—14世紀

(鎌倉時代1185—1333)にて「やり」という言葉で記載されている。(1) 槍は、日本人の信仰や神話で重要な役割を果たしている。日本の神話によると、日本列島は、2つの神々が槍を用いて創ったという。日本の宗教である神道の祭りの中では「やりまつり」と呼ばれる今日でもお祝いされている日、槍の祝日がある。この祝日の特別な公演としてポールウェポンを持つデモや訓練のための槍を持つ競争がある。昔、神道の社にはお守りとして小さな槍が配られていたという。

(2) 専門家によると、槍はモンゴルの襲来の以降は



特に人気が高まり、それは当時に歩兵の役割が高騰したことに原因しているらしい。19世紀の半ばまでは、通常の日本軍が槍を利用していた。

(3) 槍は、侍(領主)も一般兵も使っており、つまり、騎兵及び歩兵が利用可能であったという。槍は両手で持たれ、割る、刺す、斬る、押す打撃技、柄の裏で縛られ、回転、遮断する方法も適用されていた。槍のテクニクは、槍術として統一され、知られるようになった。

(4) 専門家が記述するように、慣例的な槍の柄は、粘性のある日本の赤い樫から作られていた。日本の典型的な槍は、曲がらない、かなり強力・重たい柄、先端が金属で被され、日本でよく行軍に際して他のポールウェポンと並びに、刀鞘に見える特殊なケースで携行された長いナイフ状の刃がある。庶民の槍は、非常に長い、軽い竹の柄及び安い先端で異なっている。標準的な槍の先端は柄に突っ込むピンで留められ、紐で固定されている。

(5) 普通の先端と違い、槍の先端は追加の切断面を含むという変化がその利用

範囲を広げたとのこと。槍は、割る打撃としてだけでなく、斬る、引っかかる、打ちたたく武器として用いられていた。おそらく、こういう多様性は、日本の典型的な鎧が斬られながら貫かれない。

特定の名称は槍だけでなく、その詳細もあった。例えば、「穂」が先端(その切っ先が「穂先」)、「刃」(切れ刃)、「鎬」が刀身の稜線)、「えぶ」が柄、「はばき」が取付けスリーブ、「千段巻」が柄の巻きつけた物

(エイの細い皮で出来る)、「セメガネ」が柄上の金属クランプ、「切羽」が柄の金具、「石突き」が滴水受皿、「鞘」が先端のケースである。三角形の断面の槍は「三角槍」だった。

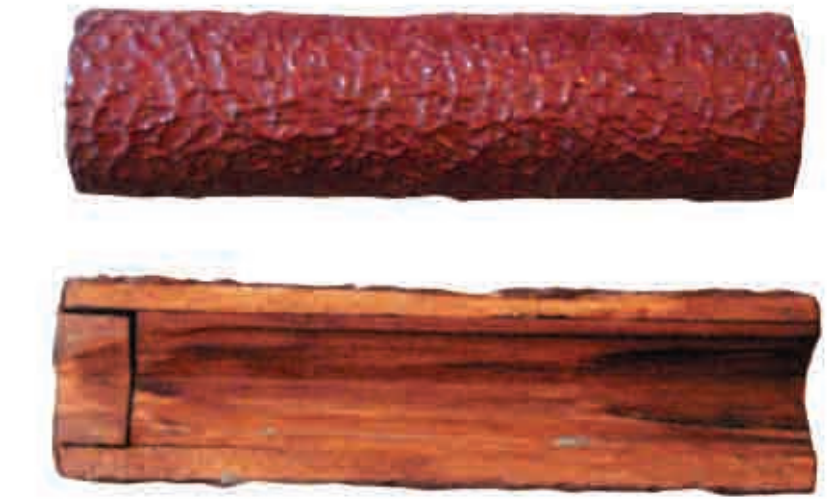
(6) この情報を通して博物館コレクションに入っている槍の成分の名称を規定するだけでなく、巻き付けの未知の皮の種類—おそらく、それはエイの皮だろう—、そして先端の羽が紐で柄に締められていたことを確かめられる。

博物館の旗・武器のファンドの目録を見ると、その槍がどのように博物館に現れたのかを分かる。1920年4月、

アゼルバイジャンはソビエトロシアの軍隊によって占領されており、ムスリム東洋の最初の民主共和国であったアゼルバイジャン民主共和国が崩壊した。ソビエト政府の弾圧が以前の共和国の活動家だけでなく、功労者、お金持ちや貴族にも襲いかかった。財産の没収が多数に及び、裁判もせずじまいだった。物的価値の収奪は、国内の多数の宝石製品、骨董品、ぜいたく品、履歴値が運び出されたことに至ってしまった。けれども、ある進歩派が残りの値のを博物館のコレクションを樹立するように集まることに成功した。この博物館は、数年後に設立されたが、まだ1920年に没収された物を保持することが出来た。

この槍がアゼルバイジャンに1917-1920年の革命事件の前にどのように現れたかについての課題が今でも不明である。革命以前の時代には日本の家庭用品等がロシア帝国内に二つの方法を通った：それは日本への旅行中に買われた物や、中国から1904-1905年の日露戦争中に捕えられた戦利品である。たぶん、このような方法もを通して上記の槍がアゼルバイジャンに運ばれたことだろう。

このように、以上の比較を踏まえた上、アゼルバイジャンの国立歴史博物館の旗・



武器のファンドにある2本の同型の槍が日本製の「三角槍」であることが分かり、それらが13-19世紀の間に作られたらしく（より正確にラブで実験を通して設定できよう）、特権階級である侍に属し（それは、赤い檜からできている適切に装飾された羽及び良質の鋼鉄から铸造された先端を見るとわかる）、アゼルバイジャンには日本への旅行中に買われた骨董品のお土産や1904-1905年の日露戦争の戦利品として運ばれたかもしれない。偉大な職人によって作られ、素晴らしい絵心で飾られたこれらの展示品は、日本の武器製造の高いレベルの出来上がりである。

アゼルバイジャンの国立歴史博物館のコレクション中の武器が軍人に役割を果たした時代が疾うであらう。本コレクションの宝物である武器の多くが芸術的に完全で、傑

出した作品でもあり、それぞれの槍が己の運命、歴史を持ち、それが不思議でも面白くも明るくも正確でもありながら、謎のように詠みにくい歴史である。◆

#### 参考文献

1. ノソフ K. S. 『侍の武装』、サンクト・ペテルブルグ、ポリゴン出版社、2001年、127頁
2. 同上、123頁
3. アスモロフ K. V. 『白兵の歴史：東洋・西洋』、第一巻、<http://www.fido.sakhalin.ru/wayofsword/PROJECTS/JAPAN/weapon/spear/spear.htm>
4. ノソフ K. S. 同上、127頁
5. アスモロフ K. V. 同上
6. ノソフ K. S. 同上、128頁